

(資料)

# 新・中国語文教学の周辺 其1 言葉遊びを巡って 宋連昌《漢字謎語》 前言 翻訳

甲 斐 勝 二\*

## 初 め に

漢字を表記文字として使ってきた漢語は、その漢字を単なる文字として使うばかりでなく、それがもつ意味の多義性、他の漢字との音韻の類似性、その漢字を形成する偏及び傍の構成要素に着目して、各種の場面で利用してきた。文字を偏や傍に分けて占う「折字」などはよく知られたものだが、同様な方法で行われる漢字当ての謎々も、小説や物語のなかで謎かけとしてしばしば用いられる。このような謎々は「字謎」として、昔から漢語の言語遊戯の重要な部分を形作ってきた。

この「字謎」を巡る故事として劉宋の劉義慶(403-44)『世説新語』捷悟篇に記載される後漢の曹操と楊脩(字、徳祖)の以下の話はよく知られている。

- (1) 楊徳祖為魏武主簿，時作相國門，始構榱桷，魏武自出看，使人題門作「活」字，便去。楊見，即令壞之。既竟，曰「門中活字，闕字。王正嫌門大也。」

楊徳祖は魏の武帝の主簿だった。そのころ相國門を作り、たるきの組み立てができたばかりのとき、魏の武帝はみずから門のところに出てきてうちながめ、門に題額をかけさせ、「活」の字を書き入れさせて立ち去った。楊徳祖はこれを見ると、すぐにこれを打ちこわさせ、すっかり終わると、いった。「門の中に活があるのは、闕の字になる。門の大きいことこそ、王(武帝)が嫌われることだ」

(翻訳は平凡社中国古典文学大系『世説新語』森三樹三郎訳による。以下同じ)

---

\* 福岡大学人文学部教授

- (2) 人餉為武一柸酪，魏武噉少許，蓋頭上題合字亦示眾。眾莫能解。次至楊脩，脩便噉，曰，公教人噉一口也，復何疑。

ある人が魏の武帝に酒器一杯の酪を贈った。魏の武帝は少しばかりのんだあと、ふたの上に「合」の字を書いて、一同の者に示した。一同は何の何か、わからぬ。順番が楊脩のところへきたとき、楊脩はこれを飲んで言った。「公は皆の者に一口ずつ飲めと命令してられるのだ。何も不思議がることはない」

- (3) 魏武嘗過曹娥碑下，楊脩從，碑背上見題作黃絹幼婦，外孫縶白八字。魏武謂脩曰，解不。答曰，解。魏武曰，卿未可言，待我思之。行三十里，魏武乃曰，吾已得。令脩別記所知。脩曰，黃絹，色絲也，於字為絕。幼婦，少女也，於字為妙。外孫，女子也，於字為好。縶白，受辛也，於字為辭。所謂絕妙好辭也。魏武亦記之，與脩同，乃嘆曰，我才不及卿，乃覺三十里。

魏の武帝があるとき曹娥の碑の下を通りすぎたことがあるが、楊脩もお供をしていた。碑の裏に「黄絹幼婦外孫縶白」の八字が書かれているのを見て、魏の武帝は楊脩にいった。「わかるか、どうかね」楊脩は答えた。「わかります」。魏の武帝はいった。「お前はまだ言うてはいかん。わしが思いつくまでまで」三十里ほど行ったとき、魏の武帝はいった。「わしにはわかったぞ」。楊脩が理解したことを別に書かせた。楊脩の答えは次のとおりである。「黄絹とあるのは色のある糸の意味で、文字にすると『絶』になる。幼婦は少女であり、文字にすると『妙』になる。外孫とは女の子であり、文字にすると『好』になる。縶白は辛を受け入れるものであるから、文字にすると『辭』（辞）となる。つまり『絶妙好辞』ということである」魏の武帝も自分の解答を書いたが、楊脩のものと同じであったので、感嘆していった。「わしの才能はお前におくれをとること、三十里であることがやっとわかったぞ」。

以上の3種の話は、収められた捷悟篇の篇名からも知れるように、曹操と楊脩の思考の鋭さや頭の回転のはやさを語るために記されたものだけでも、同時に、漢字を利用した謎々を解くことが思考の鋭さを計るものでもあったことも物語っている。もっとも、この思考の鋭さが仇となり曹操の嫉妬を呼び楊脩は処刑されてしまうことになるのだが。

趙宋の周必大の『玉堂雜記』には、析字が得意な謝石をからかおうとした人物が、これ

は分けられないだろうと「乃」の字を示したところに、謝石が「乃」の字は「及」の字にまだ成っていない文字だから、君は生涯科挙には及第しないだろうと答えた話が載せられている。からかった方はさぞがっかりしたろうが、これもまた漢字の字形の解釈を巡る頓智の優秀さを示すものとなる。

こういった漢字を用いた謎々遊びは現代でも盛んで、元宵節や中秋節などには今でもなお同好者の集まりが催され、祭を飾る提灯に貼り付けられると聞く。また、漢字を使えるのなら、こういった遊びができるようになってほしい、という期待も現代中国の社会にあるのではあるまいか。近年の成人用識字課本『成人字族文識字読本』（中共中央党校出版社 1995/10 北京）の識字課程最後の課文には次のような夫婦による字謎の掛け合いが記載されているからだ。

夫婦猜謎：

曾文东学了《成人字族文识字读本》，已认识二千多个汉字，读书看报兴趣很浓，懂的道理也多了。一天，他编了一个字谜请妻子猜。字谜只有四句：

地上土一堆，用力往前推，用钢做成锥，说说它是谁。

妻子想了一阵，也说了一个字谜，叫曾文东猜：

志大不可摧，猜谜不用催，要问它是谁，靠山它姓崔。

曾文东说：“猜中了，你把字写来看看。”妻子说：“样子很像佳，其实不是它。”曾文东连忙补充说：“一只鸟儿刚会飞，它的名字叫小佳。”

夫妻俩都会意地笑了。

曾文東は『成人字族文識字読本』を学ぶと、すでに二千字余りの漢字を知っており、本や新聞を読むことがとてもおもしろい事に思われ、理解した智恵も多かった。ある日彼は漢字当ての謎々を作り、妻に当ててもらった。その謎々はわずか四句でできていて以下のようなもの： 地上に土一堆、力を入れて前に推す、鋼で作れば錐となる、言ってごらんよそれは誰？（地上で土の字を一つ加えれば堆の字、力を入れて用いて前に出せば推の字、鋼を使ってできるのは錐の字、言葉にしてみるとそれは誰の字）

妻はしばらく考えて、やはり漢字当て謎々を一ついい、曾文東に当てさせた：志は大きく摧けない、謎当ても催促する必要はない、それが誰か尋ねるならば、山に寄りかかる彼は崔という姓。

曾文東は“当たりだね。その文字を書いてごらん”といました。妻は“形は佳の字によく似ている、けれども本当はそれじゃあない。”曾文東はすぐさま補って“一羽の鳥が今飛べるようになりました、その鳥の名は佳ちゃんです。”

夫婦二人は共ににっこり笑いました。

このような漢字の分析は、逆に漢字を覚えるとき手段としても役に立つ。だからこそ識字教科書にも引かれるのだろう。友人の話では小学校でも、漢字を教える時に利用されているらしい（元福岡大学講師韋海英さんからの話）。例えば、（ ）の漢字を導くものとして：

「有头没有尾（由），有尾没有头（甲），有头又有尾（申），没头又没尾（田）：頭はあるがしっぽはない（由）、しっぽはあるが頭はない（甲）、頭もあればしっぽもある（申）、頭もなくしっぽもない（田）

「门里躲进一个人（闪）：門の中に人が一人隠れ込む（閃）

「大雨落在横山上（雪）：大雨が横山の上に落ちる（雪）

「口上口（曰）：口の上に口（曰）

「大口里有小口（回）：大きな口の中に小さな口（回）

など、子ども達が漢字を憶えやすいよう工夫をしていると聞く。手元にある子ども向けの謎々の本『児童趣味謎語大観』等にも「字迷」は一項目が立てられているので、中国では子供の頃からこのように漢字を分析して遊ぶ事は身近なものである。漢字の字源にうるさい方の中には、このような析字は漢字の字源理解に誤解を招き、正当な漢字教育をゆがめるものと顔をしかめる方もいるだろうが、そもそも、その時その時の理解されやすさに従って、多くの文化は発達進展して来ているのだ。めくじらを立てる必要もない。

念のために言っておけば、現在の中国では、問の対象になる漢字の字形は、簡体字が対象とされている。当たり前といえば当たり前だが、先に見た『世説新語』の時代は、漢字は所謂繁体字だったから、その繁体字の字体が謎々の対象になった。よって、当てるべき漢字も繁体字になる。しかし、現代の中国では簡体字が一般的な表記手段となって久しい。よって、謎々作りでも簡体字体の漢字を導くようになることは当然だ。だとすると、同じ漢字を当てる謎々にしても、当てるべき文字が繁体字となると、つまり繁体字を継承する台湾・香港等とは問題の作り方も違ってくることになる。残念ながら目下台湾や香

港の漢字謎々については知らないが、かかる謎々はそこで生きる人々の言語遊戯として生み出されるものだから、きっと繁体字の表記圏では繁体字の字謎が今でも生み出され続けているはずである。

さて、以下に訳出して紹介しようとする文章は、中国で出版された《漢字謎語》（中国社会科学出版社 1993）に載せる編者宋連昌氏の「前言」である。この書籍はその後《漢字謎大系》（学苑出版社 2003）として改訂版が出た。新版の「前言」は些か書き直されているが、大筋に変化はない。新版の後記には、《謎語大系》が速やかに完売されたこと、その後の追加で掲載の謎々もかなり増えたこと等が記されている。以てかかる書籍の人気や、漢字の謎々が変わらずに作り出され、楽しまれている中国の様子を知ることができよう。

しかしながら、遊びとはいえ、才知のひらめきを示すものでもある。よって漢字の謎々には各種の工夫が凝らされており、中国でも一般の読者にとってはなかなか解くのも難しい。それは日本語の謎々でも同じだろう。簡単に解けるようではおもしろくない。

この書の前言では、そういった人々のために、漢字謎々を解く方法が4種15類に分けて説明されている。この解き方を逆に考えれば、漢字謎々の作り方にもなるわけだから、これは作ろうとする人にとっても役に立つ。これが分かると答えの導き方もかなり推測しやすくなろう。もちろん、それでも作る側の工夫次第でいくらでも難しくはなるのだろうが、こういった手ほどきがあると漢字謎々の理解も容易になるし、謎の答え探しにも推測がきくというものだ。この説明を読めば、謎々を説いてみようという初心者には手掛かりができ、続けて考えていこうという気持ちも出てくるに違いない。

と言うわけで、漢語教材としてかかる謎々を利用しようとする方や、漢語の言語遊戯に興味のある方のために紹介すれば何らかの役に立つだろうと、「漢字謎々入門」として訳出する事にした。今回翻訳を試みて感じたことは、中国語（漢語）の語法はもちろんのこと漢字の形・音・義、意味の多義性、句読の可能性などを複雑に組み合わせたこのような謎々は、「遊び」とはいえ、奥は深く中国語の特徴を考える上でいろいろな意味で示唆に富むと言うことだ。

例に引かれた謎の答えを導く解説については、本来地の文として書かれたものを、読みやすくするように「解説」として項目を建て、問と答とその答が導かれる理由をわかりやすくしている。それでも、かかる言語遊戯は、その言語や独特の文字表記を知らないと分かりづらい所が多々ある。例えば、同様に漢字を用いている日本だが、現代中国の簡体字

とはずいぶん異なっている漢字も多い。簡体字が答となっている場合、( )の中に入れた日本語訳からは推測し難いものも多くあるのではないか。解説が足りないところや無いところは訳者が語句を加えて補っているが、それでもわかりにくいところが多いことを心配する。

訳者の頭の鈍さは自他共に認めるところであるから、きっと間違いや誤解も多いだろう。当座の話題作りの役に立てば良いと思う。問いの後の訳文中(A; B)となっている場合Aが通常の解釈で、Bが謎々の意図の解釈である。

謎の理解の間違いなどに気付かれた方からの御教示をお待ちします。

なお、大修館書店1990江口一久編『ことば遊びの民族誌』の中には、「析字考」・「中国の古典遊戯詩」・「ペキン語の言語遊戯」・「現代上海語のことば遊び」等が修められ、漢語の言語遊戯の紹介としてすぐれ、漢字謎についても触れられているので、参考にされたい。

## 漢字謎々入門

### 宋連昌《漢字謎語》 前言 翻訳

通常私たち言っている「謎語」は、とてもひろい概念を持つ。そこには、事物謎・文義謎・景物謎・印章謎・将棋謎・郵便切手謎・声像謎・故事謎・射覆謎、及び画謎・咄謎・動作謎等々がある。その上、俗に「灯謎」(提灯にはってある謎々)と呼ばれる文義謎(言葉を当てる謎々)にはさらに文字・俗語・成語・詩詞及び各種の事物など題材の違いによる区分がある。この書では謎語の中の文字謎についてのみ編集している。

文字謎、正確に言うならば漢字謎だが、これは中国の漢字の特徴とその分離合併と増加減損における形・音・義の変化によって生み出される謎々の一種である。これは謎々全体からすればその一部分に過ぎないけれども、しかし非常に重要な部分なのだ。この文字謎は、その構想が精巧で、興味深さに溢れ、洗煉されてもおお親しみ深さもあり、幅広い人々に好まれて、多くの人々に愛されている。文字謎を当てること、それは考える力を鍛えて、知識を増加させるだけではない。高尚な情緒を涵養し、しかも美の芸術的喜びも手

に入れることもできるのだ。だからこそ、長い間衰えず、しかも益々普及して、益々多彩で豊かになり、絶えず新しい創作がなされるのである。

謎々、これは濃厚な民族の特徴をもつ文化芸術様式である。謎々文化は中国には悠久の歴史がある。つとに三千年余り前の西周初期にすでにその萌芽を見ることができる。最も早いころは“瘦辞”、“隠語”と呼ばれていた。それは言わんとする言葉を隠すという意味である。《国語・晋語》の中に“秦からの客が朝廷にて瘦辞を使ったところ、貴族たちは対応できる者がいなかった”（《国語》原文は「廋辞」、韋昭の注には「廋とは隠である。隠し伏せ巧みな言葉で朝廷で問いかけたのである」とあり、本来は「廋」と「瘦」とは異なる文字。音が近く通用される）という言葉があり、《韓非子》及び《左伝》の中にも同様の記載がある。秦から漢になると、“瘦辞”、“隠語”は次第に“謎語”に向かい、南北朝になると、謎語はしだいに成熟していった。唐代・宋代、とりわけ宋代では、謎語はかなり大きな発展を見た。当時都の汴梁では謎語を作ったり、謎当てなどの活動は非常に一般的であった。また謎々作家や節句に掲げる提灯に謎をかける灯謎の組織、謎々の専門書などが出現し、毎年正月の十五日前後に集中して謎あての活動を行った。さらに謎語は各種技芸の一つと見なされて、いつでも群衆に娯楽と日常性的な遊戯形式を提供するものとなったのだ。その中には多くの字謎があった。このような状況と共に、謎語の題材も大きく拡大し、形式はいっそう多様化し、王安石・蘇東坡・秦少游等の大政治家であり大文学者でもある者も謎語の制作活動に参加している。誠に当時の謎語の盛んさが見取れよう。明代清代になると、謎文化はまたもやさらに進んだ発展繁栄を迎える。前人の基礎を継承し発展させて、謎語の形態も少なからぬ創作があり、また十種類を越える謎の様式が現れた。中でも文義謎は、新時代的な発展があったと言って好い。清代では謎活動は時代を通してずっと活発で、謎社や謎学クラブもいっそう増え、謎語の専著も百種類の大きさになった。清末民初では、灯謎には南北に分かれる異なったスタイルの二派が生まれた。これらのものは、中国の謎学の遺産の継承、謎学知識の普及、人材の養成、灯謎事業の発展と繁栄の推進などに積極的な作用を起こしたのだった。政治、経済地位および文化生活の水準が上がるにしたがって、中国の人々も古い伝統ある謎文化に対して、濃厚な興味を一層持つようになったばかりでなく、さらに積極的な参加者ともなった。たくさんの灯謎の愛好者は、あちらこちらに数百社の謎社・謎協会を組織して、その会員は数多く、中国の各地にあまねく広がっている。彼らはしばしば各種の謎あて会、検討会を開いて、謎あて競技も挙行している。灯謎知識の普及に努力することは、民間の文化的生活を活発にす

ることだ。とりわけ興味深いのは、現在の灯謎に関わる人々は、やはり自覚的に灯謎が人々の役に立つようにとの方針のもと、健康な内容で、思想性を持ち、教育的意義ある新しい灯謎を創作し、精神文明を導こうとしていることである。例えば、

「身残心不残（答：息）」（解：身体に障害があっても、心に障害はない→息：身の上半分と心で息の文字）

「一心生一个（答：性）」（解：一つの心で一人を生む→性：一つの心の文字と生の文字一つと読み直して性の文字）

「丢开个人得失（答：佚）」（解：個人の得失を捨て去る→佚：一般的な意味は左の訳になるが、読み方によっては「人の文字を横に置いて失の字を加える」の意味になる。）

「人人树立四化志（答：徳）」（解：人びとは四つの現代化の志を立てる→徳：人びとが行人偏となり、徳の右側は志の間に四の文字が入るので）

「提倡晚婚，个个有份（答：日）」（解：晩婚の奨励は、それぞれに責任がある→日：提／倡／晩／婚の文字、それぞれにあると読み直し、日の文字が答えとなる）

「摘掉穷帽子，扎下富根子（答：男）」（解：ぼろの帽子を取り去り、太い根っこを張る→男：穷の頭の部分－穴を取り去り、富の文字の下の部分－田に潜り込ませると読み直す）

「摘掉穷帽子，拔掉穷根子（答：八）」（解：ぼろの帽子を取り去り、やせた根っこを抜き去る→八：上と同様に、穷の上の部分－ウ冠を取り去り、その根の部分－力を取り去ると読んで、残るのは八）

「四化目标振人心，革命路上快奔马（答：羈）」（解：四つの現代化目標に人びとの心は奮い立ち、革命の道に馬を疾駆する→羈：四を上置き、革と馬とで羈）

「虚心使人向上（答：仑）」（解：素直な心が人を向上させる→仑：虚の字の中央－七に人を上に置くと仑になるので。）

「不甘心落后（答：丕）」（解：後れをとるわけにはいかない→丕：不の文字に甘の文字の中央－一をとってその後に置くと丕）

「海峡两边今团聚（答：涪）」（解：海峡の両側は今では仲間→涪：海峡のそれぞれの漢字の両側の文字－水と山に今の文字が仲間になると涪）

「山里家家摘穷帽（答：豳）」（解：山中の家々はみなぼろの帽子を取る→豳：山の文字中に家家の文字の上の部分をとった豕が二つで豳）

「大力合作实地干（答：夯）」（解：大いに力を合わせて現場で仕事をす→夯：大と力



を合わせれば夯一地固めをする胴つきのこと)

以上のものは、みな現代の雰囲気を感じる優秀な作品である。内容の良さばかりでなく、表現手法の上でも誠に適切であり、巧みである。

漢字謎を当てるにはいったいどうすればよいのだろう。それぞれの人々の意見は完全には一致せず、数十種の異なった方法を並べた人もいた。その他に、十数種の「体」と二十種あまりの「格」も謎当ての方法に関係するという。このような事は謎学の研究者にとっては必要なものかも知れない。しかし、一般人にとっては、あまりに複雑すぎる。考えるに、謎を当てるにはやはり単純で明確な方法がよい。さもなければ目はくらくらしてしまい、時には恐怖感さえ起こしてしまう。とりわけ二十余種の謎格などといわれても、よほど努力して研究しないとちゃんと理解できはしないだろう。

漢字謎というものは漢字の形・義・音を基礎とするもので、その主要な特徴は漢字の形・義・音の変化及び別の解釈を利用して、謎の問と答えを組み合わせるものだ。よって、漢字謎を当てる為には、先ず漢字の構造と音義の特徴をある程度理解しておかねばならない。これが漢字謎を当てる基礎である。さもなければ、手のつけようもなく、謎の答えを知っても、何でそうなるのか分からないということすら起きてしまう。また、基本的な推測方法というものを把握しておく必要がある。これは最も重要なものだ。歴代の謎研究家の残した資料に基づいて帰納すると、謎の推測方法は三・四十種を下らない。筆者が考えるに、その中の幾つかは似たり寄ったりで、中には分類が細かすぎるものもあるから、以下の四体・十五法をちゃんと把握しておけば何とかなるだろう。

よく使われる謎のスタイルとは、象形体・会意体・離合体及び分扣体である。それぞれの体は、さらに幾つかの手法に分かれる。以下にそれぞれの推測法について簡単に紹介しておこう。

**1 象形法：**象形法とはつまり比喩法のこと、それは漢字の筆画・偏旁そのままの形を利用して喩え、答えを導くもの。

例：① 「三潭印月」（杭州西湖の景勝地の名前）

答 「心」。解説：「心」の文字の三点を杭州の西湖にある三つの小さな塔形式の建築物に喩え、中の鉤がたの部分を三日月に喩えている。

② 「篮板」（バスケットボールのゴール）

答「問」。解説：「問」の文字がバスケットボールのゴールの板の部分を喩えており、良く似たものとなっている。

その他の例として

- ③ 「三桅船」(マスト三本の船)

答は「巡」。解説：見た目が似ている。

- ④ 「記念碑」(記念碑)

答は「且」。これは上と同じである。

同じ筆画でも幾つかの異なった事物を表す場合もある。

- ⑤ 「、」 答は瓜の種・星・豆粒・ボール。

- ⑥ 「一」 答は丸木橋・ピアノ線・木の板・地平線。

**2 会意法**：漢字から意味を考える方法、つまり問いかけの部分からそこに含まれる意味を考え、さらに進んで答えを推し量るもの。

例：① 「黙読」(黙読；言をつかぬ読) 答「卖」。解説：問の語自体の意味は「声を出さずに読む」というもの、読むときに声を出さなければ、言(葉)はない、そこでその答えは「読」の字から「言」(讠)の偏を取った「卖」となる。

② 「大树」(大樹；巨木) 答「柜」。解説：「大树」はその語の意味を、「巨木」と理解することが出来る。「巨と木」を合わせれば「柜」となる。よって、この問の答えは、「柜」となる。

③ 「花生糖」(落花生飴；花が生む飴) 答「蜜」。解説：なぜならば、蜜はミツバチが花粉を集めて発酵させて作ったもので、花から生まれた甘いものだと解釈できるからだ。

中には、些か複雑で何度かひねってようやく分かるものもある。

④ 「尼姑」(尼さん；頭に毛のない女性) 答「委」。解説：「尼姑」と「委」とにいかなる関係があるのか。そもそも、「委」の文字は「禾」と「女」分けられる。「禾」の字は「秃」の字の頭に当たり、これらを合せば、「委」の文字は「秃頭女」(髪の毛のない女性)となり、つまりは「尼姑」となる。

**3 別解法**：漢字の持つ一字多義を利用し、問いかけの中でその本来の意味を変えて答えを探すもの。

① 「格外大方」(とりわけ上品；枠の外に大きな長方形) 答「回」。解説：この場合「格外」は、とりわけ・非常に、という意味ではなく、「格(枠)とその外側」という意味で、これが別の解釈である。「大方」大きな方形のこと。

② 「兄弟合作」(兄弟合作；兄と弟で作る) 答「捉」。解説：手と足を兄弟だと解釈できるから、答は「捉」となる。

別解法を使うと、問いかけの含蓄性を増すことができ、さらに一層面白さが加わる。

#### 4 仮借法：問いかけの中に直接は必要な事柄を含まず、別のものを利用してその言葉の代用とするもの。

① 「千里相逢」(千里隔てて出会う；千里が出会う) 答「驟」。解説：「千里」とは「千里の馬」の言い換えで、「相逢」から「聚」(集まる)を導いて、「馬」(马)と「聚」の文字が逢わされれば、「驟」の文字となる。

② 「未必多言」(多言を要しない；未に言を加えよ) 答「羊」。解説：この「未」は「羊」の言い換えである。というのは干支の8番目に来る「未」は動物では「羊」に対応しているからだ。「多言」から、「言偏が加わる」という意味が導かれる。「羊」に「言」(讠)が加えられれば、当然「羊」となる。

③ 「千里到中国」(千里越えて中国に来る；千里が中国につく) 答「驛」。解説：「千里」から上に見たように「馬」が導かれ、「中国」から「華」(华)が導かれる。

④ 「龙年得千金」(龍の年に千金を得る；龍年が千金を得る) 答「娠」。解説：「龍年」から干支の「辰」が導かれ、「千金」は娘の言い換えだから(「千金女」の例有り)「女」が導かれる。

良く用いられる仮借には、干支の仮借以外に、人名の仮借、地名の仮借、時間の仮借、朝廷の仮借などがある。

#### 5 換算法：同じ数量の言葉に換算し合って答えを当てるもの。

① 「三个星期」(三週間)

答「昔」。解説：三週間は二十一日、つまり廿一日と書けるから。

② 「九十九」

答「白」。解説：白の文字は百から一の横棒をひいたものだから。

③「十五天」（十五日） 答「胖」。解説：一月の半分だから。

④「一尺一」（一尺一寸） 答「寺」。解説：一尺一寸は、十一寸で、組み合わせれば寺となるから。

⑤「七十二小时」（七十二時間）

答「晶」。解説：七十二時間は三日、日が三つだから。

以上は換算法を使って作られる問いかけである。

**6 切断法**：漢語の特徴である句点の打ち方によって意味が変わるというものを利用し、わざと通常の部分では切らず別の所に読点を打ち、本来の言葉とは別の解釈をさせるもの。

①「十二点」（十二時；十に二つの点） 答「斗」。 解説：通常のように十二点と続けて読まず、「十、二点」と読み、「十、さらに二つ点あり」という意味で解釈する。

②「一个撇」（筆払い一つ；一つの个に筆払い） 答「介」。 解説：通常のように「一个撇」と続けて読まずに、「一个、撇」と読み、「一つの个、さらに筆払い“丿”あり」という意味で解釈する。

**7 合成法**：二つ或いは二つ以上の漢字を一つに組み合わせて別に新しい漢字を導く。

①「母女俩」（母娘二人；母と女の二つ） 答「姆」。解説：母+女。

②「可上可下」（上がりもでき下がりもできる；可が上で可が下） 答「哥」。解説：可+可。

③「行将就木」（木の所まで行く；行が木にくっつく） 答「桁」。解説：行+木。

④「大力合作」（大いに合作する；大と力を合わせて作る） 答「夯」。解説：大+力。

⑤「十月十日」 答「朝」。解説：十+日+十+月。

**8 分離法**：合成法とは逆で、一つの文字の一部分を切り捨てて、残した部分が答えとなるもの。

① 「留下一半」（半分残す；留の字の下部を残す） 答 「田」。解説：「留」の文字の下半分を残せという意味に解釈できるから。

② 「拿下边去」（下側を取りさる；拿の下部をとりさる） 答 「合」。解説：「拿」の文字の下側を取り去れという意味に解釈できるから。

③ 「啃了一口」（一口嚙る；口の部分を嚙ってしまう） 答 「肯」。解説：「啃」の文字の口の部分を食べてしまえという意味に解釈できるから。

④ 「果断」 答 「田」、「木」。解説：果の文字を切断せよと解釈できるから。

**9 離合法：**離合法とは、まず分解して後に合体させるやりかたで、通常まず二つの違う文字を分解し、それからそれぞれの文字の切り離れた一部分を合わせて別の文字に作り上げるもの。

① 「喜上眉梢」（歡びが眉尻に浮かぶ；喜の字の上と眉の字の先） 答 「声」。解説：「喜」の文字の上の部分「土」を切り離し、「眉」の文字の上部（末梢部分）と組み合わせると一つにすれば、「声」の文字ができあがる。

② 「千分之一加百分之一」（千分の一に百分の一を加える；千の字から一を分け、百の字から一を分ける） 答 「伯」。解説：「千」の文字から「一」の文字を分離すれば残るのは人偏となり、「百」の文字から「一」の文字を分離すれば残るのは「白」の文字となる。人偏に「白」の文字を加えれば「伯」の文字が出来上がる。

その他の例：

③ 「售出一半」（半分を売り出す；售と出の字の各半分） 答 「崔」。解説：「售」「出」の半分ずつを加えて作る。

④ 「半耕半读」（半分耕作半分読書；耕、読の字の半分） 答 「讲」。解説：「耕」の半分「读」の半分を加えて作る。

⑤ 「软硬兼施」（あめとむちの両使い；軟と硬の字を合わせる） 答 「砍」。解説：「軟」「硬」両方の部分を合わせよ。

⑥ 「化验前后」（化学実験の後先；化と験の字の前と後） 答 「俭」（儉）。解説：「化」「験」の前部と後部。

⑦ 「癮头来了」（熱中しだした；癮の頭部に了が来る） 答 「疗」（療）。解

説：「癮」の頭部「疒」に、「了」を加える。

**10 増補法**：問いかけの文字の中に増補の説明或いは表示があるもの、例えば筆画や、部首・偏旁を加えると答えとなるようなもの。これが合成法と異なるのは、通常そこに加えられるのは完全な文字ではなく文字の「一部分」にすぎないからである。

① 「落点好」（落下点が良い；点を打つと良の字） 答 「良」。解説：この字に点をうてば「好」（良）となるので。

② 「一直下去」（まっすぐ下って行く；一の字を書き下ろせば去） 答 「去」。解説：この字に一の字をまっすぐおろせば「去」となるので。

③ 「一斤多点」（一斤余り；一つの斤の字に点が多い） 答 「斥」。解説：斤の文字に点を増加させれば「斥」になるので。

④ 「一来就再见」（来るや否やさようなら；一の字が来ると再が現れる） 答 「冉」。解説：一の文字を持ってくれば、「再」の文字が現れるので。

⑤ 「迁来一口」（一人引っ越してくる；迁の字に口を一つ） 答 「适」。解説：「迁」に口の文字を移動してくれば「适」となるので。<sup>①</sup>

**11 減損法**：これは10の増補法とまるで逆で、答えの中に説明或いは表示があるもの、例えば筆画や部首・偏旁を省いたりするもの。これが8の分離法と異なるのは、分離法は文字を二つの部分に分けるのに対して、減損法は何画かの筆画や、「一部分」を取り去るからである。

① 「国外自动化」（国外自動化；国の字の外側が自然に消える） 答 「玉」。解説：「国」の文字の外側の枠が自然に消えれば、残るのは玉の文字だから。

② 「打手出界」（手下が外に出る；打の字の手の部分が去る） 答 「丁」。解説：「打」の文字の前部にある「手」（手偏）が去ってしまえば残るのは丁の部分だから。

③ 「夫人莫入」（夫人は入るな；夫の字に人の字は入れるな） 答 「二」。解説：「夫」の文字に「人」の文字を入れてはならないという意味になるので。

④ 「河水奔流」（河の水が奔流する；河の字の水の部分が流れ去る） 答

<sup>①</sup> ここは簡体字ならでは「問い」。迁は繁体字「遷」、适は繁体字「適」で繁体字では謎々は成立しない。

「可」。解説：「河」の文字の「水」(三水)が流れていってしまえば、残るのは可の文字だから。

⑤ 「尘土飞扬」(塵埃が舞い上がる；尘の字から土の字が飛んで行く) 答 「小」。解説：「尘」の文字から「土」が飛んで行けば、残るのは小の文字だから。

⑥ 「何人不在」(誰だっている；何の字で人がいない) 答 「可」。解説：「何」の文字から「人」(人偏)がなくなれば、残るのは可の文字だから。

⑦ 「明月当空」(明月が空にある；明の字の月の部分を空ける) 答 「日」。解説：「明」の文字から「月」の字を空白にすれば、残るのは日の文字だから。

⑧ 「日环食」(日食；日の字の環が食される) 答 「一」。解説：「日」の文字から周囲つまり環(環)を取り去れば、残るのは一の文字だから。

⑨ 「接上去」(くっつける；接の字の前部を取る) 答 「妾」。解説：「接」の文字から、前(上)の部分を取り去れば、残るのは妾の文字だから。

⑩ 「少一些，再少一些」(減らし更に減らす；些の字から一を少なくし、また些の字から一を少なくする) 答 「此」。解説：「些」から「一」の文字を少なくし、さらに「一」の文字を少なくすると残るのは此の文字だから。

**12 移位法：**漢字のある筆画、或いは部分の位置を移動して問いかけとするもの。以下がその例である。

① 「一举而成」(一挙にできあがる；一を上を上に上げれば而の文字になる) 答 「血」。解説：この字から「一」の文字を下から上に上げれば「而」の文字が出来上がるから。

② 「改革旧业」(昔の仕事を改革する；旧と业の文字を組み替える) 答 「晋」。解説：「旧」の縦棒を「业」の上に横にして置き、残った「日」の文字を組み合わせれば「晋」の文字が出来上がるから。

③ 「离位分居」(仕事を離れて分居する；位の字を離し、居の字を分ける) 答 「僻」。解説：「位」の文字を「人」と「立」に離し、「居」の文字を「尸」と「十」と「口」に分けて組み合わせれば「僻」の文字になるから。

④ 「主动一点」(少し自発的になる；主の字から一点が動く) 答 「玉」。解説：「主」の文字の「丶」を移動すれば「玉」の文字になるから。

⑤ 「机动一下」(一度融通を利かせる；机の字を動かす) 答 「朵」。解

説：「机」の文字の「木」と「几」とを分けて「木」を下に動かせば「朶」ができあがるから。

⑥ 「另有变动」（另に變動有り；另の字を動かして変える） 答 「加」、  
「叻」。解説：「另」を「口」と「力」に分けて動かせば、「加」又は「叻」になるから。

⑦ 「晕头转向」（頭がくらくらして方向が分からない；晕の字の頭の位地を変える） 答 「暉」（暉）。解説：「晕」（暈）の頭にある「日」の字を位置を変えれば「暉」の文字になるから。

⑧ 「桉树移栽」（ユーカリの木を植え替える；桉の字の木の部分を移し替える） 答 「案」。解説：「桉」の文字の「木」を移し替えれば「案」の文字になるから。

⑨ 「部位调整」（部位の調整；部の字の各位置を調整する） 答 「陪」。解説：「部」のそれぞれの部分の位置を変えれば「陪」の文字となるから。

**13 指示法：**問いかけの中に巧妙にその答えが隠されているもの。通常、この種の問いかけには比較的答えやすいのだが、しかし、問いかけの表現が、実際に言いたい意味とは必ずしも一致しないので、時にはじっくり考えねば答えが見つからない場合もある。例として以下のものがある。

① 「对头」（敵；对の字の頭） 答 「又」。解説：「冤家对头」の「对头」（敵）で解釈するのではなく「对字的前头」（对字の前部）の意味で解釈すると、「又」の字となるから。

② 「脚心」（土踏まず；脚の字の中心） 答 「去」。解説：「脚」の字の中心には、「去」があるから。

③ 「墙根」（壁の下；墙の字の根本） 答 「回」。解説：「墙」の下部には「回」があるから。

④ 「党中央」（党中央；党の字の中央） 答 「口」。解説：「党」の中央には、「口」があるから。

⑤ 「初恋」（初恋；恋の字の初め） 答 「亦」。解説：「恋」の文字の初めにおかれているのは「亦」だから。

⑥ 「空前」（空前；空の字の前） 答 「穴」。解説：「空」の文字の前におか



れているのは「穴」だから。

⑦ 「皇后」（皇后；皇の字の後） 答 「王」。解説：「皇」の文字の後におかれているのは「王」の文字だから。

⑧ 「没劲头」（力がない；劲の字の頭がない） 答 「力」。解説：「劲」の文字の頭にある「丷」がなくなれば、残るのは「力」の文字だから。

⑨ 「没写上」（書いていない；写の字の上がない） 答 「与」。解説：「写」の上部がなくなれば「与」の文字が残るから。

**14 包含法：**問いかけに出てくる文字全て、或いはその一部に答えが共通して含まれているもの。例としては

① 「运动会」（運動会；运の字、动の字にあつまる） 答 「云」。解説：「运・动」共に集められているのは「云」の文字だから。

② 「加劲劳动，个个有份」（仕事に力を入れるのは、それぞれの責任；加・劲・劳・动、それぞれの字にある） 答 「力」。解説：「加・劲・劳・动」の文字それぞれにあるのは「力」の文字だから。

③ 「甜咸苦辣，各味俱全」（甘いしょっぱい苦い辛い、それぞれの味が皆そろろう；甜・咸・苦・辣、それぞれの味の字にみなそろっている） 答 「口」。解説：「甜・咸・苦・辣・各・味」それぞれの文字には「口」の文字があるから。

④ 「天有地没有，你有他有我没有」（天に有り地にはなく、君は持っていて彼も持っていて私は持っていない；天の字にはあり、地の字にはなく、你的字にはあり他の字にもあり、私の字にはない） 答 「人」。解説「天・你・他」には「人」の文字が含まれ、「地・我」の文字には「人」の文字がないから。

**15 方位法：**問いかけの文字に対して、“上が北、下が南、左が西、右が東”の原則にしたがって東西南北を決め、巧みに答えを示唆するもの。例としては

① 「江西省」（江西省；江の西を省く） 答 「工」。解説：「江」の文字の西、つまり左側にある三水を省略すれば残るのは「工」だから。

② 「重点支援大西北」（大西北を重点的に支援する；大の字の西北に点を重ねて支援する） 答 「头」（頭）。解説：「大」の文字の西北、つまり右上に点を重ねて加えてやれば、「头」になるから、答えは「头」の文字となる。

以上 15 種の方法は基本的なもので、この他にも用典法、問答法、変義法、倒影法、転動法、暈字法、推理法等々があるが、全てをここに述べることはやめておく。ここで指摘しておかねばならないのは、問いかげの中には一つの方法で答えを当てられるものもあるけれども、しかし、一種類の方法だけでなく、二種や多種の作り方を兼ねている問いかげがかなり多いということである。例えば、上に挙げた「江西省」と「重点支援大西北」の「江西」「大西北」では方位法を用いているが、「省」の解釈は別解法（ここでは「省」を行政区分の省で解釈するのではなく、省略の「省」の意味で解釈）だし、「重点」では転音法（「重」は問いかげでは“zhòng”と読むが、答えでは、「点を重（chóng）ねる」という意味で使われ、文字は同じでもそれぞれ発音が異なる）を用いている。また、上述の方法が分かったとしても、それは漢字のなぞなぞを解くための初歩的な推測の方法を知ったにすぎない。実際の具体的な推測の過程で出くわす状況はこれらに比べてもっと複雑である。形式通りに単純に応用するわけにはいかず、臨機応変に対応する必要がある。また、どんな種類の謎々を考えるとときであろうとも、問いかげの制作者の意図を先ず推し測り、しかる後に頭をはたらかせ何度も考え直し、小さな事から沢山の事柄を導くように連想をたくましくさせる必要がある。当然ながら、常々勉強を続け、知識を広げ、可能な限り多くの古典の詩文及び成語故事に習熟しておく必要がある。そうすれば、頭の回転もさらに早くなるだろう。

筆者は若い頃から、漢字の謎々に興味を覚え、謎当て会があると、何とかして参加し、質の高い漢字の謎々を随時集めてきた。近頃、仕事の暇を見つけて、以前集めたり作ったりした漢字の謎々を整理してみた。数えてみると、3960 以上になった。中国の現代では謎々の書籍はまだ多くはないので、これを出版して、現代の人々や後世の人々にある程度整った漢字謎々の資料として残すことにしようと考えたのである。

1991 年 10 月 7 日 北京